

山岡亮一先生を送る

関 田 英 里

山岡亮一先生は1981年8月9日で高知大学長を退任された。71年8月10日に就任されてから満10年であった。

先生の御就任当時、高知大学でもまだ学園紛争の火が燃えさかっていた。先生は、ほんとうに捨身で、先頭に立って事態の收拾にあたられ、学園は比較的短期間に静謐をとり戻すことができた。その後、先生御在任のうちに高知大学は文理学部の人文学部と理学部への分離改組、2つの実験所の発展的改組による海洋生物教育研究センターの設置、小島文庫の受入れをはじめ、施設・設備の新設・拡充など、大きく発展して面目を一新した。それらについて先生の御功績は大きい。しかし、そのような有形のものとともに、大学としての望ましい民主的な制度・慣行・秩序など、無形の大学づくりに果された先生の御功績はさらに大きい。先生は教職員・学生に大学人としてのあり方を常に身を以て示され、全構成員による大学の自治、自由闊達で清新な学風を極めて大切なこととされた。

山岡先生は高知大学をほんとうに心から愛され、そのために10年間「全力投球」を続けられた。教職員の一人一人を大切にされ、その言うところを虚心に聴き、暖く受けとめながら、要所要所で高い指導性を発揮され、ときには厳しく、テコでも動かぬ信念を示された。また、学生に対しては深い愛情と信頼をもって接せられ、学生たちの行事・集会には招かれれば必ず出席され（しばしば奥様御同伴であった）、素朴で滋味に溢れる話をされた。私たちは真の教育者というものをそこに見ることができた。

つけ加えれば、先生は国立大学協会の理事・第四常置委員会委員長として、また日本学術会議議員（第3部）として、全国の国立大学と学界のために、精

根をつくし、信念をもって発言・行動され、大きな貢献もされた。

私たちの「高知大学経済学会」とのかかわりでは、山岡先生には学長になられるとすぐに賛助会員になっていただいた。以来、賛助会員、というよりは顧問的存在としての先生から、学会と学会員は陰に陽に多くの御指導と御協力を賜ってきた。この学会は先生の御就任の少し前の1971年4月に発足していたが、機関誌『海南経済学』第1号の発行は少しおくれて73年1月であって、この創刊にあたっては、先生に物心両面の御援助をいただいたことであった。機関誌は第7号から現在の『高知論叢（社会科学）』と改題されたが、その際先生に題字の揮毫をお願いし、以後毎号の表紙に掲げさせていただいている。

山岡先生が高知大学長の席を去られるにあたって、「高知大学経済学会」の会員一同、先生の御功績を称え、御労苦を犒い申しあげるとともに、10年間にわたる学会への御指導と御協力に対して深い感謝の念を捧げつつ、先生をお送り申しあげるのである。

山岡先生は、1909年京都市のお生れで、京都府立第一中学校・第三高等学校を経て、京都帝国大学経済学部を1934年に卒業され、大学院に進まれた。1936年には同大学経済学部講師になられたが、間もなく召集によって足かけ8年の軍隊生活を送られる。戦後復員して、1946年助教授、49年には教授となられている。その後、ドイツに1年余の留学、アメリカにも短期出張をされ、経済学部長（2度）や学生部長（1度）など数々の重責を果してこられた。

先生の大学院時代の論文に「小農経済論より見たる地代」があるが、以来先生は“小農”と“地代”、“土地所有”の問題を常に念頭におきつつ研究を進めてこられた。戦前には、農業経済学発祥の地ドイツのテーヤやチューネンなどの農業経営理論、ゴルツなどの歴史学派の学説を批判的に検討された（先生訳ゴルツ『独逸農業史』有斐閣、1936年、はいまに名訳の名が高い）。また、マーシャルやシュンペーターなどの学説についても農業（地代や収穫逓減法則）との関連でつっこんだ検討をされている。親友の島恭彦・故松井清両先生と3人でマルクスの勉強もしておられたということである。

戦後、軍隊から復員して京大経済学部に戻られた先生は、農政学者として、あの画期的な「農地改革」に直面された。変貌する農村の現実を正確に認識すること、「改革」を通じて生まれ出た小農を学問的にどう把握するかということ、それらの課題に先生は真剣に立ち向われた。先生は鳥取県中浜村を手始めに、京都府・大阪府など各地で農地改革の調査にとりくまれ、『大阪府農地改革史』などをまとめられたが、その後も数多くの農村・山村の実態調査・共同研究を主宰され、調査報告書を発表しておられる。

先生の調査は、現実から虚心に学び、農民から謙虚に学ぶことに徹したもので、「自分の理論に対する反省材料」として、実態調査と現状分析を絶えず繰り返して行くことが必要だと強調されていたという。

理論的には、

「農地改革後の日本の小農を如何に把握するかという問題意識から、山岡先生は、戦前から関心を寄せておられたマルクスの地代論や過渡的地代形態論、および土地所有論の研究に本格的に取組まれた。その結果、農業経済学を広義の経済学の一環として位置づけ、小経営的生産様式の生成・発展・消滅の過程を世界史的観点から追求して、そのなかで過渡的地代諸形態の位置づけを明確にするとともに、社会主義への移行過程における農業問題をも、その多様性において把握するという先生の独自の立場が確立された。戦前からの小農経済の研究が、こうした形で完成され、主著『農業経済理論の研究』（有斐閣、1962年）に結実したということができよう。」（山雪会編『現代農業と小農問題——山岡亮一先生還暦記念——』有斐閣、1972年、464ページ）

先生の学者としての態度については、門下生が次のように書いている。

「山岡先生は、よく御自分のことを『各駅停車』だといわれる。新幹線のようにスマートに走りはしないが、沿線の景色に気を配りながら一步一步と着実に目的地に進んでいこうとする、御自分のどろくさい、学問と生活の態度をいいあらわされたものであろう。しかし現在の困難な日本農業が求めているのは、このような、農民的で、どろくさい学問の姿勢ではないだろう

か。」(同上書466ページ)

そういえば、先生は“**Festina lente!**”(ゆっくり急げ)を座右銘としておられ、高知大学の卒業式でも卒業生への餞の言葉とされたことがある。

それにしても、広義の経済学のなかで、日本の小農・小経営的生産様式を把握されようとする先生の目は、現代の日本はもとより、空間的にはドイツをはじめヨーロッパやアメリカなど世界各国に及び、歴史的には原始共同体から社会主義までの各社会構成体にわたっているから、その視野の広さは驚くべきものである。先生は、広義の経済学とそのなかでの農業経済学の完成への努力を、後進の研究者の課題としておられるが、御自身も「農政学徒の悩み」を抱えながら、絶えず、あらゆることから学びつつ、前進を続けておられる。

教えることについても、先生は「教えるたびに自身が何かを発見し、また、学生を通じて学んでいくことになる」と謙虚に言われ、ゼミではいつも学生に「一番馬鹿なことを一番最初に発言するのは一番偉いことなんだ」と言って、素朴な質問を大切にしてくられたということである。

しかも、山岡先生は研究室にたてこもるだけの学者ではなかった。日本の農業と農民の生活を守ることは農業経済学者としての責任だとされる先生は、その立場から社会的に発言もし行動もしてこられた。農業破壊・農民無視の農業政策が米の「過剰」キャンペーンから生産調整にまで及んだとき、先生は「怒り心頭に発して」、京都府農業問題協議会会長として、京都府下での米作農民を守る運動の先頭に立って行動されたという。先生の頭髪が真っ白になったのは、学生問題で苦勞したからだけではなく、この農民無視の農政に「怒り心頭に発して、真剣勝負で」日夜話して回られたからだ、とは先生御自身の言である。

そのような調査・研究・教育・社会的活動のなかで、山岡先生は多数の学生を薫陶して世に送られ、また多くの優れた学者を育ててこられた。先生のかつてのゼミ生＝門下生の集りを「山雪会」といい、それはまことに多士濟々であるが、そのメンバーの先生への敬慕の深さ・師弟愛の細やかさは、はた目にも感動的なものである。

そのような山岡亮一先生をお送りする、と言っても高知大学の学長室からお送りするだけであって、先生御夫妻は当分高知の地に御在住である。先生は高知に来住されて以来、高知大学を愛するとともに、高知という地域、その自然と人間、それらが織りなしてきた歴史的風土をこよなく愛してこられた。この高知のために、先生は県や市の各種審議会の会長や委員などを勤められ、各種座談会にも出席され、乞われればどこへでも出かけて講演されたし、また分けへだてなく各層の人々と交わってこられて、深い学殖と素朴で謙虚なお人柄によって敬慕の的となっておられる。今後も、この好きな土地に住まわれて、「高知をより深く、またより広く知りたい」と言っておられるが、10年間先生が率いてこられた高知大学をも、今後永く、暖く見守りつづけて下さるものと信じる。

学長の重責から自由になられた山岡先生には、高知の自然のなかで毎日の散歩を続けられ、日曜市の散策なども楽しまれて、いつまでも御壮健であられるように。そして、高知の地域と高知大学にとって、導きの星として、いつでも仰ぎ見ることのできる存在であられるように。また、先生とともに歩んでこられた奥様・悠紀子夫人が、ともどもに御健康を保たれ、御多幸であられるように。このように、心から祈念申しあげるものである。

〔附記〕

山岡亮一先生の高知大学長御就任の頃までの御経歴と著作目録は、京都大学経済学会『経済論叢』第109巻第3号＝山岡亮一教授記念号（1972年3月）と、山雪会編『現代農業と小農問題——山岡亮一先生還暦記念——』（有斐閣、1972年6月）に掲げられている。また、先生御自身による研究生活の回顧については「一農政学徒の悩み」と題する京都大学での退官記念講演が『農業と経済』1972年5月号（富民協会・毎日新聞社）に掲載されている。